



牛鍋（II）

大きな肉の切れは得られないでも、小さい切れは得られる。好く煮えたのは得られないでも、生煮えなのは得られる。肉は得られないでも、葱は得られる。

浅草公園に何とかいう、動物をいろいろ見せる処がある。名高いひひ狒々のいた近辺に、母と子との猿を一しょに入れてある

檻があって、その前には例の輪





牛鍋（12）

切にした薩摩芋が置いてある。見物がその芋を竿さおの尖さきに突き刺して檻の格子の前に出すと、猿の母と子との間に悲しい争奪が始まる。芋が来れば、母の乳房を銜ふくんでいた子猿が、乳房を放して、珍らしい芋の方を取ろうとする。母猿もその芋を取ろうとする。子猿が母の腋わきを潜くぐり、股を潜り、背に乗り、頭に乗って取ろうとしても、芋は



牛鍋（13）

大抵母猿の手に落ちる。それでも四つに一つ、五つに一つは子猿の口にも入る。

母猿は争いはする。しかし芋がたまさか子猿の口に這入^{はい}っても子猿を窘^{いじ}めはしない。本能は存外醜悪でない。

箸のすばしこい本能の人は娘の親ではない。親でないのに、たまさか箸の運動に娘が成功しても叱





牛鍋 (14)

りはしない。

人は猿よりも進化している。

四本の箸は、すばしこくなくなっている男の手と、すばしこくなくなるうとしていた娘の手とに使役せられているのに、今二本の箸はとうとう動かずにしまった。

永遠に渴している目は、依然として男の顔に注がれている。世に苦味走ったという質^{たち}の男の顔に注

牛鍋（15）

がれている。

一の本能は他の本能を犠牲にする。

こんな事は獣にもあろう。しかし獣よりは人に多いようである。

人は猿より進化している。

おわり
